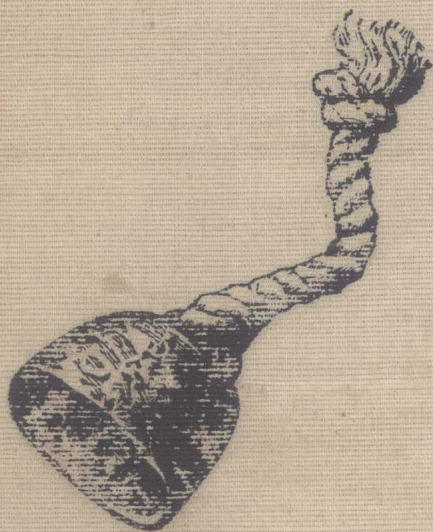




銀色の鈴

小沼丹

講談社

銀色の鈴

昭和四十六年五月一六日 第一刷発行

著 者 小沼 丹

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二一二一 郵便番号／一二二

電話／東京(九四五)一一一一(大代表) 振替／東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

定 価 六四〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Tan Onuma 1971 Printed in Japan

0093-125026-2253 (0)

(文1)

目 次

小
徑

猫
柳

山
の
あ
る
風
景

古
い
編
上
靴

9

45

67

107

落葉

昔の仲間

銀色の鈴

231

195

171

装幀 岩本正雄

銀色の鈴

小沼丹・作品集

小

徑

昔、逗子の山のなかに伯母が住んでゐて、ときどき遊びに行つた。横須賀行の電車に乗つて行くと、大船邊りで大抵空いてしまふ。まだ小學生のころだつたと思ふが、氣がついたら明るい陽差しの流れこむ車内に僕一人しかゐない。何となくいい氣分になつて見廻すと、近くの座席の窓のところに眼鏡が一つ置き忘れてあるのが眼に入つた。それを取つて來て、車掌が來たら渡さうと思つてゐる裡に、横濱かどこかで降りた一人の人物を想ひ出した。眼鏡をかけ髭を生やした肥つた人物が、眼を瞑り腕組みをしてふんぞり返つてゐた。

一體、どんな心境になるものかしらん？

その眞似をすることにして、持つて來た眼鏡を鼻にのせ、眼を瞑つて腕組みをしてゐたら、

——もしもし。

と肩を叩かれた。吃驚して眼を開くと通路に車掌が立つてゐて、笑ひながら、どちらまで？

と訊いた。眼を開けた拍子に眼鏡は鼻の下までずり落ちて、たいへん恥づかしい。急いで眼鏡をとつて、返子まで、と答へると車掌は點頭いて行つてしまつた。眼鏡については何も訊かない。こつちも改めて呼びとめて、眼鏡を渡す氣にはなれない。もとの場所に戻して來てほつとした。二度と腕組みをする氣になぞならない。

伯母の家に行つて、眼鏡を忘れた人がゐたと話したら、伯母はその持主はさぞ困つてゐるだらう、と悲しさうな顔をした。別に悲しがつてゐる譯ではないが、何だかさう見えた。想ひ出してみると、伯母の笑顔も寂しい笑顔だつた氣がする。

伯母の家は町から一里ばかり引込んだ山のなかにあつた。山に圍まれた水田や畑のなかを、自動車はやつと通れるぐらゐの田舎路が通つてゐる。その路を右手の山の方に折れて、高い赤土の崖の下ひんやりした小徑を少し登つて行くと、左手に木肌葺の門があつた。その門のなかの玄關先に銅鑼を吊して、伯母は女中と二人ひっそり住んでゐた。訪ねる人も滅多になかつたらしいから、遊びに行くといへん歡んだ。銅鑼を威勢よく鳴らすと、女中と一緒に伯母も玄關に出て來て、

——もうそろそろ見えるころだと思つてゐましたよ。

と、云つたりした。

伯母は僕を歓迎してくれた譯だが、それには順序があつて、先づ女中に町の肉屋に電話をかけさせる。それから、白いエプロンをかけて椎茸をとりに行かうと云ふ。大體、そんな順序だつたと思ふ。

伯母の家の背後は、庭の先が低い山になつてゐて、山に一本大きな辛夷の木があつた。その白い花を、伯母は縁に坐つて見物すると聞いたことがあるが、僕は別に坐つて見たことはない。右手は四つ目垣の先に高い赤土の崖がつづいてゐて、崖からは夥しい木の根が垂れ下つてゐた。この崖下の小徑を辿つて行くと、崖が次第に低くなつた先に深い竹林があつて、そのなかで椎茸を栽培してゐた。

濕つた落葉を踏んで行くと竹を疎らに伐り残した空地がある。その空地に短い丸太を二本交叉させた支柱が幾つか立ててあつて、長い丸太が渡してあつた。それに長さ一米ばかりに切つた木が兩側から交互に立てかけてある。木は太いのもあれば細いものもある。直径十糎から二十糎ぐらゐだつたと思ふ。その木に、椎茸がどつきり出てゐたのである。

一度、椎茸をとりに行つたら山番の爺さんがゐて、いろいろ話をしてくれたが大抵忘れてしまつた。椎茸だから、立てかけるのも椎の木だらうと思つてゐたら、栗、櫛、櫟なども使ふと

聞いて不思議に思つた記憶がある。それから、その木を伐るにも時期があるとか、伐つた木をどうするとか聞いたが憶えてゐない。

——伯母さんは何遍聞いても、忘れてしまふのよ。

と伯母が云つたら、山番の爺さんは苦笑してゐたが、伯母は椎茸をとればいいのでそれ以上のことは知らうとも思はなかつたのだらう。

椎茸をとると云つても、木についてゐる奴の根元を小刀で切つて、持つて來た筈に入れるだけで何の變哲もない。しかし、しいんとした山のなかで椎茸をとつてゐると、ときをり、鶯が啼いたりして悪くなかつた。

あるとき、何かの拍子で伯母は筈を引つくり返して椎茸があたりに散らばつた。伯母がしやがんで拾ふのを手傳つてゐたら、伯母の頭の天邊の地肌が丸く透けて見えるのを發見した。明るい陽差しが落ちてゐたから氣がついたのか、そのときたまたま髭の如きものを入れるのを忘れてゐたのか、その邊のところは判らない。

——伯母さん、禿があるの？

不思議に思つてさう訊くと、

——いやですよ、そんなこと大きな聲で云つちや……。

と、伯母は立ち上つて、手の甲で頭を軽く押へる恰好をした。それから、日本髪を長いこと結つてゐると頭の天邊が禿げるのだと教へてくれた。さう云へば伯母の昔の寫眞を見ると、大抵日本髪を結つてゐたと思ふ。あるひは、伯父の好みだつたのかもしれない。椎茸の栽培も伯父の案だつたさうで、

——伯父さんが愉しみにしてらしたんだけれど……。

椎茸をとりながら、伯母はよくそんなことを云つた。

何でも伯父はこの山のなかに隠居所をつくり、のんびり餘生を過さうと考へてゐたらしい。この邊一帶の山を買つて、小さな家を建てた。小さな會社を持つてゐたから、それぐらゐのこととは出来たのである。その會社の仕事を養子に譲つて、隠居所に落ちついたと思つたら一年ばかりして病氣になつて、病院の車で東京に運ばれてまもなく死んだ。

伯母の話だと、椎茸ばかりでなく他にもいろいろ愉しみにしてゐたことがあつたらしい。例へば山で炭を焼かせて、それを隠居所で使ふのを愉しみにしてゐて、茶の間には圍爐裏も切つてあつた。伯父は死んでしまつて、しかし、炭は焼けて来るから、圍爐裏の鐵瓶はいつも白い湯氣を立ち登らせてゐる。それから、庭に焼物の窯を築くつもりだつたとも聞いた。伯父としたり、いろいろ心残りのことが多かつたのかもしれない。

いつだったか、大分后になつて伯父の机の前に坐つてみたことがあつた。大學生になつたころだつたかもしれない。座敷の床の間の傍に、伯父の使つた机と座布團が生前そのままに置いてあつた。机の上には硯箱と數冊の本がのせてあつた。

机の前に坐つて本を見たら、唐詩選と、それから何とか云ふ日本の漢詩人の詩集であつた。

唐詩選を開いて見ると、あちこち、朱で丸や點がつけてある。そのなかに二つ折りにした紙が二、三枚はさんであつたから開いて見ると、伯父の作つた七言絶句が幾つか書きつけてあつた。「山間獨居」とどこかで聞いたやうな題の詩があつたが、内容は憶えてゐない。出來榮の方は果してどんなものだつたらうか？

——伯父さんは漢詩をつくつたんですね。

と伯母に云つたら、伯母はちよつと首を傾げて、

——さあ、何だか知らないけれど、よくお机に向つて勉強なさつてゐましたよ。

と云つた。あるひはこれも、心残りの一つであつたかもしれない。

伯母のところには古い蓄音器があつて、古ぼけた布張りのレコオド・ケエスにレコオドが一杯つまつてゐた。伯母は僕が退屈すると思ふのか、レコオドでもおかけなさいな、と云ふこと